

熊本城 復興に向けて

〈11〉昭和2年の宇土櫓修復

西南戦争や明治22年(1889)の地震を乗り越えた建造物は、陸軍によって管理されていました。しかし、大正末頃には荒廃が進み、なかでも激しく破損した宇土櫓の姿に人々は心を痛めていました。大正14年(1925)10月、当時第六師団司令部附だった深澤友彦氏は輜重兵将校小島徳貞氏の家を訪れ、宇土櫓の修復について会談しました。ところが、陸軍省では予算が無いため修復は出来ず、大蔵省に引き継ごうとしますが、大蔵省は「このような厄介千万のものは御免を蒙る」として引き受けない(小島徳貞「熊本城址保存会を回顧して」1940年)という状況でした。そこで、保存を危惧した小島氏ら陸軍関係者が中心となり、大正15年(1926)、熊本城址保存会(のち熊本城址保存会、現在の熊本城顕彰会の前身)が設立されました。その設立の目的は、城郭を保持し櫓の修理を行うことで「光輝アル遺跡ヲ永遠ニ保存」するとあるように、文化財として熊本城を保存しようとする動きが生まれた最初のものと言えるでしょう。その後、熊本城の保存の機運はますます高まり、宇土櫓を除く櫓群や長堀は、陸軍省の費用で修復されることとなりました。

さて、熊本城址保存会は宇土櫓の修復に向けて、広く資金を募りました。その活動のなかでは、「熊本市－熊本城＝0」というキャッチコピーのポスターも作られ、市民・県民のほか、海外からも多くの寄附金が寄せられました。昭和2年(1927)3月には宇土櫓の修復費用として十分な寄附金が集まり、同年6月24日に工事に着手しました。工事は、陸軍省から宇土櫓と必要な土地が城址保存会に貸与されたうえで、工事費用3万5千円の範囲で工事を城址保存会から師団経理部に委任し、師団経理部で施工業者の入札が行われ、実施されました。当初、櫓全ての解体は行わない予定でしたが、白蟻による被害が思いのほか大きかったため全解体修理とな



▲修復前と修復中の宇土櫓(熊本城調査研究センター蔵)

り、五階櫓の基礎をコンクリート造とし、内部は鉄骨製の筋交いで補強されました。起工からおよそ1か月後の7月23日には解体が完了しています。その後、8月31日に上棟式を迎え、11月20日に竣工しました。

この修復の過程では、さまざまな発見があったようです。例えば、小島氏の回顧録によれば五階櫓の部材のなかから享保5年(1720)や文政9年(1826)の年号が銘記されたものが発見され、江戸時代を通じて度々修理されていたことが分かりました。また、屋根には第六師団で保管されていた青銅製の鯨が載せられました。

竣工後、宇土櫓は一般に公開され多くの見学者で賑わいました。昭和35年(1960)に天守が再建されるまで、廻縁や高欄をもつ五階櫓の姿は、焼失した天守に代わって熊本城のシンボルとなりました。この時の保存活動によって蘇った宇土櫓は、熊本城内でも屈指の高石垣の上に今もなお美しく建ち、その姿は人々に親しまれ続けています。